

討論・質疑応答

司会(中田喜万) 東京女子大学で日本政治外交史のご担当でいらっしゃいます、黒沢文貴先生にコメントいただきました。どうもありがとうございました。

さて本日は、フランスより、丸山眞男など日本政治思想史を研究されているジャック・ジョリ先生がご参加くださいました。急遽、私たちが主催者よりお願いをいたしまして、この第二部より先生に、パネリストに加わっていただきました。ジョリ先生、どうもありがとうございます。

ジョリ 私は現在、フランスで退職後の生活を送っているので、日本語を話す機会が少なくなりましたが、よろしくご了承のほど、お願いいたします。

丸山眞男とフランスをテーマにすると、その問題には非常に簡単に答えられます。つまり丸山眞男について、フランス人学者の研究はほとんど無いです。それはどうしてか。理由は複数あります。主なものは、もちろん丸山眞男先生自身もフランスにたいする興味は結構あったのですが、フランス語を読む力はほどほどで、話す力はなかったんです。私が数回会ったとき、日本語または英語だけで会話をしています。

した。ご承知のように、歴史上の特別な理由で、東大卒業者は敗戦までドイツ語圏の文化、文明、文学、哲学などという雰囲気の中で育まれていて、丸山先生もその点について、全く例外ではなかった。ですから、ドイツ人の哲学者・社会学者などの影響は大きいけれど、フランスの哲学者・思想家などの影響は少ないです。たとえば、丸山先生が引用したドイツ語圏の作者の中では、フランス知識人の世界で、知られていなかったか、その名著がまだ仏訳されていなかった人物が多い(Gustav Radbruch、Friedrich Meinecke等)。

もう一つの主な理由は、私の意見ですが、フランスの出版社における問題をあえて述べましょう。とくに一五年前から、フランスでの出版は、外国の思想家の翻訳文を出版するには自信に欠け、その結果、日本の思想を広く普及させることが非常にやり遂げがたい仕事になりました。そのために、私が出版社に提案した丸山眞男の労作の翻訳プロジェクトは、ほとんどが拒否されました。また、私が知っている限りで、フランス人学生たちの丸山眞男についての博士論文は無い。修士論文は二つだけ。

結論としては、この遺憾な状況を変えるには、一生懸命にがんばら

なければなりません。

「司会 どうもありがとうございます。それでは、ご報告の先生方より黒沢先生のコメントにたいする応答をいただきたいと存じます。手短にお一方三分ほどでお願いします。まずはザイフェルト先生から。」

ザイフェルト ご質問、どうもありがとうございます。三分で応答ですか(笑)。簡単にいいますと、ドイツにおけるある東アジアの思想家の受容の仕方を見えますと、三つに分けられると思います。受けとめ方、受容のグループが三つあるんですね。いわゆるアカデミックスの世界での受容の仕方をさらに二つに分けて考えます。その一つは、政治学、政治思想をやっている学者のグループです。もう一つは日本研究をやっている人々です。そして三番目は一般の読者層ですね。

アカデミックな第一のグループ、学問・大学の人、研究者などを見てみますと、丸山眞男の影響は多少あったと思います。それはファシズム研究の成果ですね。丸山のファシズム研究はわりと早い時期に訳されて、英語版が出ます。その英語版は、その本のタイトルにちよつと問題があると思います。つまり、原題は『現代政治における思想と行動』ですが、英訳になりましたら、『*Thought and behavior in modern Japanese politics*』。つまりこれは、受けとめ方の一つの問題です。

丸山が書いたものは日本研究への寄与であるか、それとも政治学的な、政治史・政治思想史一般への寄与であったかどうか、そういう問

題があると思います、ドイツでも。そのあと出てきたもの、たとえば「忠誠と反逆」は、ドイツのアカデミックなグループに属する人々に、あまり読まれてこなかった。それは一番残念だと思います。つまり、その論文を読むと、私たちの、みんなの丸山眞男にたいする見方ががらつと変わってくると思います。

最後に一般の読者層ですが、『日本の思想』という——今日もつきました——小さい文庫版ですね、ドイツの出版社から出た本です。そのときのタイトルをどのように付けたかといいますと、『*Denken in Japan*』。「日本の思想」ではなく、「日本の思想」あるいは「日本における思想」。もう二〇年前くらいから始まっているけれども、その読者層の世代的な移行があつて、若い人たちはタイトルを誤解しながら本を買っちゃったんです。つまり、『*Denken in Japan*』「日本における思想」、これはいったいどういうものを想起させるかといいますと、最初一見してみれば、これは禅とか、禅宗とか、儒教的なものとか、信仰、宗教とか、宗教的なものとか。そういうったものへのドイツ人の憧れがだんだん強まってきていて、若い世代のうちでは禅宗への憧れがやっぱり強いんですね。それで誤解して買っちゃった。そして、読んでみると、がっかりするんじゃないかって(笑)、あまりにも難しい文章で。しかしそこで論じられている内容は、日本の特有のものではなく、ドイツの思想と比べられるものもあるし、中国の思想と比べられるものもある。だからその当時、一緒に翻訳したヴォルフガング・シャモーニさんと私は、理想主義者で、翻訳代を全然考えていなかったし、一

円ももらってないけれども、一万二〇〇〇部まで売ったんですね、数年間で。ただその半分くらいは誤解して買ってしまった人々だと思います（笑）。

孫 まず、なぜ比較したときにズレを求めるかについて説明します。比較するときに類似性を求めるか、差異性を求めるか、その選択によって、研究の方向はだいぶ違うわけです。差異性を求める場合には、違う対象のそれぞれの独自性を深める。そして、その独自性についての認識を深められる。そういう研究は、比較によって一つの対象を開かれたものとしながら、またその独自性を保つことができるはずだとは思っています。ですから、丸山眞男と孫文のズレのほうが重複した部分よりもっと意味があると思います。

第二点ですけれども、中国の「古層」と日本の「古層」の違いについて論じることは、正直にいいますと、私は今までに考えたことはありません。これは黒沢先生の出された最後の三人それぞれへの質問にもつながっていますが、おそらく「古層」論という構図によって中国の歴史を解説することはほぼ不可能だと思っています。だけれども、それは決して「古層」論の意味がそれによって失われるというわけではありません。おそらく思想史研究者にとっての一番厳しい試練というのは、現象面から、いかにしてその現象面の背後の深いところあるメカニズムにまで進んでいくかということです。そういうプロセスは思想史研究にとって一番厳しい作業だと思います。「古層」論こそ、そういう一つの我々にとつての試練だと思っています。現象面で「古層」論を扱

うことには、それほど意味はないと私は考えております。

それから、丸山眞男は中国からどのような影響を受けていたかといえますと、おそらくザイフェルト先生のご報告の場合と比べれば、比較にならないほど少ないと思います。「影響」に限って言えば。

「影響」ではないけれども、丸山眞男は戦時中から戦後までずっと中国に注目し続け、非常に短いですが、各段階での確かな分析を残しました。「三民主義」についての分析は一九四〇年代の中国にたいするおそらく代表的な文章の一つです。五〇年代に入ってから、たとえば「スターリン批判」前後、丸山は中国共産党の何年かの言動について毛沢東の「矛盾論」という政治哲学に即して、非常に深い分析、深い理解を示しました。

それから親友の竹内好が亡くなってから、竹内の日記を出版すべきかどうか少しもめていたときに、丸山は彼なりの中国理解をふまえてこういうふうに発言したんです。竹内の日記は中国の非常に特殊な段階で書かれたもので、そういう意味で貴重な歴史の証言だと思う。どいういう歴史段階かといえば、日中戦争は国家対反国家の戦争で、そのときの中国は一つのまとまった国家ではなく、むしろ民衆の力で日本という国家と戦っていたと。このような分析のなかには竹内の考えの投影が見えないこともないけれども、その意味で、丸山は竹内から影響を少し受けたかもしれないけれども、基本的に丸山が自分なりの認識論をふまえた結論だと思っています。

そして、最後の「古層」論の意味について簡単に応答したいんです

けれども、丸山眞男には一つ、愛用した言葉があります。「ベクトル」という言葉です。私は「古層」論を読んでいたときに、「ベクトル」という言葉に入れ替えて読みました。つまり「古層」というイメージはどうしても石・岩のようなもので静的な存在ですね。しかし、丸山が本当に関心があるのは、歴史の動力というか、ベクトルという方向性とエネルギーをもっている、そういう歴史の混沌たる力だと思えます。その力は決して肯定か否定かによって切れていくわけではないし、われわれの言動によって直接に作用できない、というような存在です。それこそ歴史なんですね。ですから、歴史を研究するときはどうしてもその「ベクトル」のところにまで深めていかなければ、おそらく言葉の位相で勝負することになります。

そういう意味で歴史のベクトルについて丸山の考えと孫文の考え、それから世界中の人たちの考えを理解すればおそらく、日本と中国の間に線を引くこと、そして、東洋と西洋の間に線を引くこともできなくなるかもしれません。もしくはその逆に、いろんな異なるベクトルが存在していて、自分の論理で動いていくというような歴史の風景がもつとはつきり見えてくるのではないかと思えます。以上です。

金 今日はいしゃべることが限られているから、短く答えますね。もちろん、韓国でも丸山眞男にたいしているんな批判がありますが、ちょっと見ると何のための批判なのかハッキリしない。そして、批判のための批判、そんなものもありますね。それで丸山眞男を批判すれば、自分自身が少し偉く見えるかもしれないという幻想もあるように

す。それも、やはり一種の流行だと思えますけれども。

私としては、近いうちに出版される予定だと聞きましたけど、『正統と異端』とか、そういう本が大事だと思えますね。そういうものを通じて丸山眞男の思想と知識の深さとか、そういうことを知らせるのが大切なんじゃないかと思えます。

たとえば丸山眞男の代表作『現代政治の思想と行動』は、ハンギル社という出版社で翻訳が出ています。現代の古典と連続するシリーズの一つです。それを韓国の若者たちがたくさん読みます。そうして、日本でもこんな学者がいたかと、そんな反応もあります。日本の学者が書いたものは絶対読まないという大学院生もいましたけど、こういったものを読んでなるほどとか、ほかにたとえば『日本の思想』を読んで、六〇年代にもこんな考えがあったかと、そんな反応がありますね。

もう一つ話したいことは、自己批判と他者理解というのは本当に難しいことだと私は思います。そして、韓国人が韓国で日本思想史、日本に関心をもって勉強するのは思っているよりも難しい側面があります。たとえば、私の場合には、丸山眞男著作の翻訳、さらに福沢諭吉の『学問のすゝめ』、『西洋事情』、『文明論之概略』を翻訳し、作業は終わりました。もちろん翻訳だけでなく、解説の執筆まで。しかし、この本をハンギル社から現代古典シリーズとして出してくださいといったら、出版社のほうから遠慮させていたきたいといわれました。なぜなら、さつき私が話したように福沢諭吉は悪名高いから、韓国で

は。そういう難しさがありますね。

そして最後に、「古層」論にたいして私が考えるもの。さきほどの発表でも話したように、私は「古層」論を選択的に、そして戦略的に使っております。やろうと思えば「古層」論は思想史研究じゃなくて自身 の思想論にもなってしまう、そんな危険があると私は思います。それで私としては丸山先生のいう「古層」と「原型」とか、「原型」と「執拗低音」という言葉を少しずつ個別にして使っております。たとえば「古層」の場合は、歴史的に事実を確認できないといけないから、歴史的な順序とかね。そういう意味では勉強するには「古層」というのは、たぶん便利な概念ではないかと、そう考えています。そこで私たちは戦略的、選択的に使っております。以上です。

司会 どうもありがとうございます。黒沢先生、さらにご意見ありますか。

黒沢 いえ、とくにありません。

司会 それでは平石先生、もしよろしければ。

平石 時間が限られていますので、一つだけ孫歌さんに質問します。孫文の「三民主義」に関する丸山の理解にはズレがあるとのことでしたが、その議論が私にはよく理解できませんでした。近代化のために孫文は伝統的な観念を読み替える必要を認めたと言われ、しかし他方でその方法は丸山が理解したようなものではなかったと指摘されたと思います。では伝統と近代を孫文はどのように接合しようとしたのか。その点が知りたいと思います。これと関連して、「古層」論を中国

に適用するのはほとんど意味がないということでしたが、孫文がそんなにも依拠した中国の伝統は、「執拗に持続する」という意味では「古層」と呼んでもいいような気がするのですが……。

司会 では孫歌先生、よろしいですか。

孫 これは非常に難しい問題ですね。五分間で「三民主義」を解説し尽くすことはできませんので(笑)。簡単にいいますと、孫文の辛亥革命は伝統勢力によつて起こされ、進ませた革命なんです。しかしそれは挫折して、そして彼は革命を展開していくときに、どうしても民衆を動員しないと新しい軍隊を作れない、軍閥との戦いには勝てませんので、「三民主義」をまず啓蒙の演説として彼はつくったわけですね。つまり、彼の考えている民衆の新しい可能性というのはむしろ、辛亥革命を起こしたときに彼が頼った、いわば郷族社会にあった。これこそ中国の伝統の立脚点なんですね。郷族社会は非政治的な社会です。つまり、郷族社会は……。あとで説明します、五分間だから(笑)。

ともあれ、そのような力で彼は、ある程度清朝を倒した。あるいは民国を復活の形でつくりだした。そして同じような形で彼は、郷族社会の血縁関係を踏まえた忠誠心を生かして、それをそのまま民族にたいたする、国家じゃなくて国族にたいする忠誠として生かそうとしたんです。ですから、たとえば福沢の場合には数理学の精神によつて古い道徳に対抗するというような発想で伝統を利用しようとしたんですね。

平石 福沢論はともかくとして、もしおっしゃるように非政治的な

郷族社会が清朝を倒したとすれば、その社会には政治があることになりませんか。

孫 あります。だから、非政治的な自由と政治的な自由の間に孫文は線を引かない。

平石 そうしますと、郷族社会は一種の政治性をもつわけで、それを非政治的社会というのは矛盾することになりませんか。それとも、中国社会は政治と非政治の世界に分断されているのでしょうか。

孫 静的に見れば、そのように分断するんですけども、動的に見れば、非政治的社会は常に政治社会に変更できる。これは中国の歴史状況から見えてくる「古層」というか。つまり「古層」論はそのまゝ適用できないといったのは、「古層」論の意義は言葉にあるのではないです。中身をもっている分析の枠組みなんです。だから、もし、それを空っぽにして「古層」はイコール「伝統」だという言葉の入れ替えをすればそれは適用できます。だけれども、その適用自体はおそらく分析には役に立ちません。

平石 それはわかりました。

司会 どうもありがとうございました。ジャック・ジョリ先生、よろしければ第一部の報告にたいするコメント、または、今の議論について何か。

ジョリ 先ほどの私の話に補足をさせていただきたいのですが、『日本政治思想史研究』の仏訳というのは、もともとレヴィ・ストロース先生の一九八一年の来日後のお願いにに応じて、やっと一九九五年に、

第一章だけ翻訳されて出版されたものです。あの時代、出版社はオリエンタリズム、東洋学専用のコレクションとして出版し、その結果、丸山眞男の本が東洋学のものであると見なされてしまったので、そういう制約の下で、この出版物は、日本学者の小さいグループ以外には、一般読者の中ではあまりにも影響を与えなかった。

それと比べて、来年の秋に出版する予定の『日本政治思想史研究』の仏訳の第二版は、もちろん第一章・第二章・第三章をまとめた内容で、そしてより一般読者向きな出版社から出され、今後は丸山先生の本来は東洋学としてではなく、政治思想史、世界政治思想史として扱われることができ、その新しい枠の中で丸山眞男先生の考察が、日本の思想ではなく、日本人の思想でもなく、一般の人、世界の人の思想と見なされるようになると思われます。そうすると、丸山先生が取り上げた政治思想史上の主な問題を討論することが可能になると思います。また、第二版の序文を執筆する予定の方は、フランスでメディアによく現れている有名な世界政治思想の専門家である。そういう新しい条件で、丸山先生の著作は、前より、好意的な歓迎を受けられると思われます。

司会 どうもありがとうございました。ザイフェルト先生におうかがいしたいのですが、イギリスでもアメリカの文脈でも、丸山眞男といえますとどうしても政治学の分野というよりは日本研究で着目されます。今のジャック・ジョリ先生のお話でも、東洋研究の中で扱われることが多いということでした。ザイフェルト先生は、丸山を政

治思想としてご研究されていますけど、ドイツの文脈ではどうなんですか。やはり日本研究の中なんですか。

ザイフェルト ちょうど今のご質問は、この前にお話しいただいた方々の問題提起の一つにかかわる話です。つまりさきほど付け加えようと思ったのですが、ドイツの政治学会は、非西洋世界の政治思想についてほとんど関心がなかったけれども、これはこの一〇年間でほぼ変わってきました。

一例をあげますと、二年前に私はドイツの政治学会のある分科会に出席して丸山眞男の政治思想についての一部分について報告しました。その分科会は正式的な分科会よりもちょっと、若手研究者のグループみたいなものです。そのグループは政治学会内、その枠内で活躍していますが、彼らの付けたタイトルは、非西洋圏における民主制と民主主義的思想。これをテーマにして、日本、アフリカの国、中国、韓国などについてのそれぞれ報告がありました。

それとのかかわりで、あるハンブルク大学の助教授にいわれました。「私たちはこれから非西洋圏の民主制、民主主義の思想についての資料がほしいんです。まず中江兆民の『三酔人経綸問答』のドイツ語訳を作りませんか。英語版があって、ドイツ人はもちろん英語がわかるけれども、ドイツ語で読みたくなってきた」といわれました。そのことについて私は真面目に考えたいと考えています。これは一例です。

ただ考えてみてください。これは、今、二〇一六年のことです。丸山先生が書いたものは、直接に民主主義とかかわっていますけれども、

これは一九四〇年代、五〇年代、六〇年代ぐらいに書かれたものです。だからひどいんですよ、この遅れているドイツの政治学会の状況。もう一つは、今の私にとって非常にありがたいのは、孫歌先生の報告と金先生の報告、アジア、東アジアの政治思想についての報告です。これは本当に重要なもので、私たちヨーロッパ人は、いつも第一にアメリカ、南米とか、そういうものを見えています。東アジアのことをほとんど見ないんですね。

最後に出てきた「古層」論ですが、これは私はちょっと理解があまりにも浅いし、伝統思想とかかわっている諸問題が含まれていると思います。これこそが大事だと思っています。それを知るべきですね。

そうすると日本研究の人だけじゃなくて、政治学、哲学の人にもまず第一に資料をあたえなければなりません。だからそういう意味において、丸山眞男の論文のドイツ語訳は第一歩ですね。

これから、様々な問題があります。さきほどの報告で触れましたけど、丸山さんは、まず高校生の時代に、若い時代に語学に力を入れました。これは今のドイツの大学制度ではどうでしょうか。私の判断では、ドイツの高校生はまずドイツ語を学ばなくてはいけない。しかし弱まっています。今の大学ではきちんとした学士論文、修士論文とか、書けない人も多い。それでも教授たちはOK、OKといって量的に大学間競争をはかっているでしょう。このようにまず語学の力が非常に弱まってきました。ましてや外国語、とくにアジアの言葉は本当にわれわれにとって難しいです。漢字は数が多すぎるから。そういう意味

で条件が悪くなったけれども、それにもかかわらずがんばらなきゃいけないと思います。

司会 ジョリ先生どうぞ。

ジョリ 一言付け加えたいのですが、フランス人の中で、あるいはフランス語圏に、丸山眞男の思想を広めるためのもう一つの手段としては、比較研究を行うことです。たとえば、先生の思想とドイツ人の有名な哲学者ハンナ・アーレントの思想の比較研究、とくに「悪の恐ろしい陳腐さ」という有名なテーマを通じて二人の思考方法の分析を行えば、二人とも同じ立場に至ったことは意義深いことと思います。

終わりに、フランスでは、高校三年生みんなが哲学を勉強しなければなりません。将来、高校生みんながちょっとだけでも丸山眞男先生の思考方法を勉強することがカリキュラムの一部になれば、本当にうれしく思います。

司会 どうもありがとうございました。ぜひ期待したいと思います。金錫根先生、韓国の政治学会、あるいは政治思想学会の状況は、わりあい日本と近いのではないかと思うのですけれども、たださきほどの黒沢先生のコメントにもありましたように、若い世代が政治思想史を学んでいるのか、あるいは、学会での位置づけはどのようなのか、もう少しお話しいただけますか。

金 私を知る限りは、韓国の政治思想学会と日本の政治思想学会は互いに一年に一回集まって会議をしていますから、韓国では東アジアや日本の政治思想史、思想にたいする関心は高いと思っています。し

かし、韓国の政治学会において政治思想分野が占める比重、あるいはそれに対する関心などはだんだん減ってきているように思われます。

もう一つは、昨日丸山文庫に行つて書架をながめたとき、私の目には韓国の本が飛び込んできました。私は個人的には、これから丸山眞男の朝鮮観、あるいは韓国観にたいしても研究を進めていきたいです。

司会 どうもありがとうございました。時間を超過しておりますけれども、あと一〇分ほどお時間をいただきまして、会場の皆みなさまとの質疑応答を楽しみたいと存じます。

—— 孫先生に質問したいのですが、実は私、最近丸山の「古層」「バツソオステイナート」に関する論文を英語で発表したんです。それは国際関係論の文脈の中で当てはめるといふ試みだったので、その次に考えているのはさつき孫先生がまったくおっしゃった通りの、比較するときの対象として類似性よりも差異性を考えるということ、私もすごく同感する部分があります。その差異性を考えるために、丸山の「執拗低音」を何とかして使う方法というのはないんだろうかと思うつつ、その一方で先生がおっしゃったように、現象面でもこれを扱うことというのはなかなか困難だということにもまったく同意します。

それで、先生がさきほど、ただ「バツソオステイナート」はある意味分析枠組みだというふうに考えることができて、その中身をどうするかとおっしゃったんだと思うんですけども、そのあたりのお考えをもう少し説明していただけたらと思います。よろしくお願ひしま

す。

司会 孫歌先生、いかがでしょうか。

孫 この質問はとても複雑な理論の問題にかかわっていますので、どこまで答えられるかちょっと自信がないですけど、簡単にいいますと、日本研究によって私たちが何を求めるか。日本人が日本研究をやることによって、自分の過去、自分のアイデンティティを明らかにするというのはおそらく一般的な理解だと思えます。あるいは社会をわかれわれの発想の変化によって変化させる。それはつまり日本のために日本研究をやるわけですね。

私の場合には中国人として日本研究をやってきたんですけども、それは何のためかと。そしたらやはり、まず、日本研究を一つのフィールドワークとして、あるいは人を鍛える場として、私は自分の国籍と母語を脇に置いて、なるべく日本人と同じように日本のことを理解しようとした。しかしその目的は、自分の思想を、自分の考える能力をもっと精密にして、もっと的確にして、そしてそういう能力を得ることによって、今度ほかの、たとえば中国でも日本でも韓国でも東南アジアでもアメリカでも、同じように的確に把握しようとする。そもそも一つの国のために研究をやるというのは原初的な動機ではあるかもしれないけれども、最終的な終着点になるべきではないと私は考えております。これ以上展開すれば、人類の一部としてどうやって人類を理解するのか、というややこしいことになりますのでやめます。

では、そういう日本の論理に沿って日本研究をやっているときに得

た成果を、どのようにして、たとえばまず中国でそれを語るか。実は私は結構、韓国で日本のことを語らせられるんです。最近もマレーシアで語らせられたんです。そういうまったく違う文化の状況、違う文脈、違う要望にたいして私はどういうふうに出すべきかという問題が、必ず生じるわけです。私の少ない経験では、日本のことはそのまま、つまり現象面あるいは結論をそのまま取り出して違う文脈に入れようとすればいくら努力しても成功する可能性が少ない。

だけれども、日本から得られた収穫は、たとえば丸山を読めば読むほど、私は非常に訓練されたと思います。彼はその時代時代の状況に即してこういうふう発言したと。それは空理空論ではない、方法論でもない。具体的な問題について彼はこういうふう考えた。そして彼の認識論から私は、得たものはかなり多かったです。たとえば「三民主義」に戻りますと、丸山のズレにはそれなりの正当性があると私は思います。だから、そのズレを真正面から扱うことによって私はさらに丸山の精神世界の奥に一步前進しようとして、それと同時に丸山を媒介にして、もっと日本社会の歴史の中の動き方、それを理解しようとしたんです。

これと同じような研究の結論は、私はそのまま中国に持ち出さないです。つまり持ち出しても、中国人にはほとんどそのままでは意味をもたないことになります。だから中国に持ち込むときにどうしても転換する。そういう作業が必要だと思えます。転換すれば「古層」論は、中国の中でおそらく伝統の動いている動力とは何かと。そして「古層」

論の中身は、おそらく中国の動力の中から出てこないと思いますが、でも同じ眼差しでおそらく丸山眞男は非常に、一種の彼のジレンマもありませんけど、「近代日本の思想と文学」の中で、理論の限界について非常に自覚をもって書いた。それは非常に大きいことだと思います。

彼は最後まで理性で仕事をしたんです。だけれども、それと同時に理性によって切り離された、落とされたものを哀惜の感情で拾ってくるということの重要性も彼はもっているんです。だから「古層」論はある意味では、彼はこのことを実践しようとするという側面はないわけではないと思いますが、それにもかかわらず、そのまま中国の歴史動力を研究することはできないと思います。むしろ「古層」論を書き出したときの彼のジレンマ、彼の悩み、それから彼の眼差し、それを転換することによって、中国歴史を見るときの動力、あるいは見るときの認識論をつくり出そうとするのが私のこれからの作業だと思えます。

司会 ご質問なされた方、よろしいですか。詳しくは、懇親会がありますので（笑）、そちらでお願いします。もうお一方だけどうぞ。

—— 現代日本の政治を考えようという仕事をしておりますから、その立場から先生方みなさまにお尋ねします。まずザイフェルトさんにお尋ねしたいのは、丸山がドイツの政治思想などを勉強して、戦後すぐに「超国家主義の論理と心理」というような理論的な枠組みで議論をしておりますけれども、彼の国家論はその後、たとえば一九六〇年代日本の研究に専念したときに、変容したのだろうか。あるいは

失った、変更したんだろうかということをお尋ねしたいと思えます。

それから孫歌先生には、国族と民族の対比のところに着目して孫文と丸山のところをご説明くださいましたけども、逆に今の状況下、今のアジア、東アジアの政治を考えますと、何か過剰に国族化しているために東アジアの関係が悪化しているのではないかと。むしろ、民族に依拠したほうが安定には資するのではないかというふうな感じもいたしますけれども、それをどうお考えになるのかということをお聞きたいと思えます。

それから、バーシェイさんにお聞きすればいいのですが、ご欠席されているので、ちょっと平石先生にお尋ねしたいんです。午前の講演で先生のおっしゃった「転向」というのは、バーシェイさんのいう「プロテスタント化」ということになるのだろうかということをお聞きたい。

それから金先生には、「古層」論とか「執拗低音」論に言及されて、非常に用意周到に、戦略的に使うというふうな言及をなされたんですが、学問方法というよりも何か社会批判の方法論のほうにより意味があるとお考えで、それらに言及していらっしゃるのかということをお尋ねしたいと思えます。

司会 ありがとうございます。それではみなさま一言ずつでお願いいたします。ザイフェルト先生から。

ザイフェルト ご質問、ありがとうございます。私は国法学の専

門家ではないのですが、丸山には、ある意味ではマックス・ウェーバーやカール・シュミットを勉強したときに得た知識がずっと続いていたと思います。それがどういうふう具体的に変わってきたか、ちよつと答えられないけれども、一つだけ強調したいことがあります。それは国際政治における国家の問題ですね。その点で私は丸山眞男が勉強してきたウェーバーの論文とシュミットの論文と、その知識を必死に勉強したんですけど、丸山と彼らは最初から違った立場を形成したという気がします。とくに国際政治における自国の国家権力、いわゆる国家主義者としての考え方は、たとえばウェーバーと比較してみますと、丸山には最初からなかったと私は思います。だからその後にも、とくに第二次大戦後、そんなに変わっていないと思います。なぜ両者が最初から異なった形だったかと言いますと歴史的な背景が違うからです。ウェーバーとシュミットが経験した時代と、原爆を含めて丸山が経験した第二次大戦の時代、ということが決定的に違う見方を生み出したと思います。今はこれ以上、答えることはできません。

孫 国家対国家という構図は、「三民主義」を論じた一九二四年の時点での孫文の発想です。それと、その発想を論理的に証明したのは、彼の「大アジア主義」の中での論点だと思えます。つまり国族Ⅱ王道、国家Ⅱ覇道というような分け方を彼はしているわけです。その中には国族は、すでに民族より上であるような対比になります。孫文は死ぬ前に、改革は成功していない、同志たちは努力しなければならぬという遺言を残して亡くなりましたけれども、そのあとには国民党にして

も共産党にしても、どっちも国族ではなくて、普通の国家でもないような「党国」、つまり政党によってコントロールされる国家というスタイル、政治スタイルを作り出した。

そして現在、中国の状況は、郷里空間がほとんど形の上で解体されました。そして四九年以来中国はずっと近代国家というメカニズムによってつくり直されました。それにもかかわらず郷里空間は今、要素としてこの現代国家のなかでメカニズムとしてなお力強く生きています。そういう意味でおそらくナショナリズム、民族主義というより、中国の郷里空間は要素として、これからはどういうふう中国社会を動いていくかということがもつとリアルな問題なのかもしれません。

平石 私の述べた「転向」という言葉と、それからパーシエイさんがいっている「プロテスタント的想像力」というのは、レベルが違います。パーシエイさんがいっているのは、それこそ丸山の実存にかかわるレベルの問題です。しかし、私が午前講演で申しました戦後転向というのは、基本的には政治の、理論のレベルの話です。ただ、そのことは午前中にも申しましたように、丸山にとって、戦前の父親とか周りから得たいわゆる重臣リベラル、オールドリベラルというものがもっている考え方とか価値意識とか、そういうものを自分自身の中から対象化していかなければならなかった。そういう意味においては、その実存的なレベルにおけるコンバージョンというものともかわりがあると考えます。

金 「古層」とか「執拗低音」とか、私は、この問題は普遍性と特殊

性の問題と連結して理解しております。たとえば同じ仏教や儒教でも、やはり中国と韓国と日本とでは違いますね。実は夕べ、ここから歩いて吉祥寺駅まで行きました。それで途中、吉祥寺という名の寺はどこですかと聞いたら、無いといわれて（笑）。それで四軒寺、武蔵野八幡宮を訪問しました。四軒寺はやはり同じ仏教の寺なんですけど、韓国と全然、本当に違う、そんな雰囲気でしたね。それは端的な例になるのではないかと思います。以上です。

司会 どうもありがとうございます。吉祥寺は駒込のほうにあります（笑）。

いよいよエンジンがかかってきて面白くなってきましたんですけども、時間が大幅に超過してしまいました。最後にパネリストのみなさまに盛大な拍手をお願いします。（拍手）